

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391300169		
法人名	社会福祉法人グリーンコープ		
事業所名	グループホーム ほのか・豊野		
所在地	熊本県宇城市豊野町糸石3928-1		
自己評価作成日	平成31年2月26日	評価結果市町村受理日	令和元年5月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成31年3月20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症対応型共同生活介護事業所として開所5年目を迎える。豊野地域では元々、訪問介護事業を行い、現在も継続して高齢者介護事業に従事している。地域密着型の高齢者の住環境や独居世帯などの現実的な生活ニーズに精通しており、「ご自宅での生活が一番である」という思いを基本に、ご自宅での生活環境の延長上の「生活の場」それぞれのご利用者の尊い人生時間をお送りいただける場をどうあるべきかをご入居前の状態から把握し、地域の馴染みの関係の延長上にある共同生活の支援の場であり、顔見知りらしく集う場でありたい。その思いで開所し現在に至っている。在宅生活介護支援の延長上であることを意識し、それぞれのご利用者様の生活背景を十分把握し、サービスを提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域の声から設立されたホームは、開所以来地域との繋がりに焦点を当て運営している。馴染みの医療機関での受診や、小・中学校との相互交流、地域の物産館からの食材配達などを通じ、入居者が暮らしてきたエリアをホーム活動にうまく取り入れている。入居者にとって慣れ親しんだ支援は、入居後の生活にもほりと自信をもたらし、個々の趣味や特技にも反映されている。サロンを活用した地域高齢者への介護保険利用に関するミニ講義は行政とタイアップし、小・中学生の職場体験の受け入れや、同業者との研修会の開催など地域貢献に寄与しながら、高齢者福祉の質の向上に向け法人と一体となって邁進している。職員の希望休への対応や、働ける時間の自己申請が出来る環境は、非常勤者へのケアに関わりたいとする思いに配慮し、資格取得への後押しなどと共に、働きやすい環境作りにも力を尽くしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所内に掲示しており、職員一人一人に書面でも配布している。いつでも確認できる環境をつくり、日々の介護につなげている。	法人理念をもとに、地域密着型理念を開所時に職員が考え現在に至っている。毎朝の申し送りで、理念を更に具現化した8項目の基本スタンス(姿勢)を職員で唱和し、各自が目標を持ってケアに入るようにしている。職員移動に伴い新たに入職した職員へは新人研修を通じ、ホームのこれまでの取組や理念について、話す時間を持っている。	年度末の取組の一つとして理念の見直しが検討されており、一年を振り返る機会としてまた、新たな理念に移行するか否か、踏み込んだ話し合いが期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	サロンを定期的で開催し、地域との交流の場としている。地域住民との共通理解とコミュニケーションの場として、情報発信と収集にも役立っている。	ホームは自治会に入り、地域の一員として活動している。清掃活動には参加できないものの、独自で時間を見ながら周辺の掃除をするよう心掛けている。地域交流室では2か月ごとにサロンを開催しており、地域の参加者に2か月間の出来事を話題としたり、サロンでやってみたいことを尋ねながら運営に反映させるとともに、入居者との交流の場として活用されている。地元小・中学校のナイストライや職場体験の受け入れにより、運動会には席を準備して招待してもらうなど相互交流が実現している。	会費の協力をしながら自治会に加入しており、今後回覧板のやり取りを通じ、入居者が地域情報を知る機会になればと考える。取組に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	サロン活動や、運営推進会議にて、日々の支援状況を、地域の方に向けて報告する場を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催し、事業所の活動報告や入居者の状況報告をしている。行政や地域の方からの質問や助言を受けサービス向上に生かしている。	地域交流室を会場として2か月ごとに開催されている。行政や包括の他、地域からも毎回参加が得られている。年度初回にはホーム内(リビング・トイレ・居室など)を案内して入居者の普段の姿を直接見てもらい、会議内容とスライドさせることで状況把握ができるように工夫している。身体拘束についてもホームの基本姿勢を示し、研修内容などについて報告している。全家族が周知するよう、面会時や家族会を通じ紹介するようになっている。	参加者から「介護度3以上でないといれんのだろうか？」など、入居に関する質問なども出ており、今後は記録として残すことやナイストライの前後などに学校関係者に参加を打診し、取組みの趣旨等を話してもらうことも検討したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月行政に向けて、施設の入居状況等を報告し、密な連携をとっている。2ヶ月に1回のグループホーム連絡会に参加し、地域の他グループホームとの協力関係を築いている。	運営推進会議に行政や地域包括が参加しており、ホームの現状を発信して共有する機会としている。管理者は必要があれば双方の機関に出向き、書類提出や相談事に応じてもらいながら信頼関係を築いている。グループホーム連絡協議会に籍を置き、研修会への参加や他事業所の訪問見学を通じ、連携を深め運営に反映させている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「緊急性」「一時性」「非代替性」という3つの条件を理解し、身体拘束はしてはいけないという基本スタンスでケアを提供している。運営推進会議と併せて、身体拘束等の適正化のための対策を検討する委員会を開催している。	身体拘束に関わるホームの指針をもとに研修会を開催し、運営推進会議を通じてホームの取組を啓発している。職員アンケートを実施してセイフティーマネジメントをより強化し、拘束や虐待への認識を深めている。広い敷地であるが目の前を公道が走っていることから、外出傾向にある入居者へは、職員が寄り添いさりげなく同行している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月1回の職場会議で虐待防止委員会を開催し、意見交換を行っている。意見箱を設置し各職員からの情報も収集している。各職員から年に1回アンケートを取り、意識付けとともに、虐待防止に取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内や外部の研修へ参加する機会を設けている。入居者に後見人制度を利用されている方もおり、より認識しやすい状況にある。又必要性のある方へは紹介する事ができている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者や家族へは事前の施設見学をしていただき、書面で契約書と重要事項を説明しサービス内容や費用等について十分な説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見、要望は直接又は電話にて、個別又は家族会開催時に聞かせて頂いている。運営推進会議では家族代表の方からも聞かせて頂いており運営に反映させている。意見箱も設置しており匿名での意見、要望も頂けるようにしている。集約し家族会と運営推進会議に報告している。	入居時に意見箱の存在や外部の公的相談窓口について紹介している。家族の面会時や年2回の家族会、介護計画の見直し時に意見を収集し、運営に反映させている。入居者との普段の関わりから意見や要望を引き出しており、中には自らの言葉ではっきりと思いを伝える方もおられる。	家族から寄せられた意見は全員で共有し早めの対応を心掛けているが、改善が必要な内容ばかりでなく、感謝の言葉なども記録に残すことで職員のモチベーションに繋がると思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職場会議において運営状況の報告をし、職員の意見や提案などを聞く機会がある。職員ひとりひとりが運営にかかわることを意識している。必要に応じては個別で面談を行っている。	毎月の職員会議や管理者が参加する法人会議、常勤者会議、調理スタッフ会議など担当部署に応じた会議の場を固定化して、業務改善やケアの見直しを図り運営向上への取組をしている。職員は普段から何でも言い合える関係であり、管理者は職員意見に耳を傾け、必要があれば個人面談に応じ、各研修への参加や法人による資格取得のバックアップなど、働きやすい職場環境を整える努力をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の勤務状況、意欲、スキル等総合的に把握し、労働環境や報酬を改善しやりがいを持って仕事ができるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	全ての職員へ法人内や外部の研修案内を行っている。研修が必要な職員へは、受ける事ができるよう勤務に組みこんでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会宇城ブロックに加入してネットワークづくりやお互いの事業所との交流はできている。勉強会へは職員も参加できるよう配慮している。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期のインテークの段階で幾度もコミュニケーションをとることから始め、早期になじみの関係構築が可能なように生活歴、趣味、家族関係など多様な方向性からアプローチを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記同様に家族のレスパイトケアにも重点を置き、出来るだけ正確なニーズの把握に努め、まずは信頼関係を築くようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	「その時」にグループホーム入所の必要のある方に入所して頂き、生活していくうえで必要になった時点でその都度サービスの再検討を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共同生活介護事業であることを念頭に入れ、本人の訴えに耳を傾け、気持ちよく毎日を過ごしていただいている。できることはしていただき、自分の役割を持ち、共に生活する者同士の関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	パーソンセンタードケアの考えを基本に支援している。本人と家族の関係を良い状態で保ち面会に来やすい環境をつくり介護に家族も参加しているという意識を持っていただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人が今まで築いてきたネットワークを大切に、昔からの馴染みの方の面会や、外出時にも思い出の場所へのお誘い等配慮を行っている。	家族や親戚、友人の面会時にはリビングや居室で入居者との時間をゆっくり過ごしてもらような声掛けを心掛けている。運営推進会議に来所する地域代表者も顔なじみとなり、会議前後にはリビングに顔を出し会話を楽しませている。地域の小・中学校や理容店などを引き続き交流の場としながら、関係継続に努め、編み物や菜園作り、日課としている新聞読みなど個々の趣味やこだわりが発揮できる環境を整えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が同じ空間で共同生活をされているので、より良い関わりができるよう席の配置を考慮したり、ときには利用者同士の間を職員が繋ぐなどの配慮を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了時における正確な情報提供や、関係性の継続は、非常に重要と考えており、必要に応じた対応を心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや意向は、言葉や表情にて確認するよう努めている。本人の意向を家族へ伝え、できる範囲で実現に向かうよう努力している。	職員はリビングでゆっくりされている時間帯や、入浴中など入居者と1対1になる機会に今したいことや食べたいものなどを会話の中に盛り込みながら、思いを引き出すように工夫している。自身の言葉ではっきりと表現される方がおられる一方、難聴の方や表現困難な方とのコミュニケーション作りに努め、本人の思いに寄り添いながら意向を把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	インタビューを繰り返し、出来るだけ正確なアセスメントが出来る様に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	最低限の基本的な生活リズムを守りつつも、それぞれが楽しんで、自身の力を維持出来る様な時間の過ごし方を日々提供している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期カンファレンス、緊急カンファレンス等を必要に応じて開催し、本人、家族、時に主治医の意見も取り入れ計画に反映させている。スタッフひとりひとりが参加できる仕組みを構築する。	入居者・家族の意向をしっかりと確認し、ケア会議で個々に必要な支援を見極めながらプランに繋いでいる。入居間もない方の基本情報から生活歴を把握し、自身の言葉をプランに計上しながら、まずはホームでの生活に慣れてもらいながら、他者との交流や出来る事への継続を後押しし、安心や自身に繋がる内容としている。プラン説明にあたり計画作成担当者は、文字だけでは伝わらない事を、文章をかみ砕き表現を変えながら対応するようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の変化や、状態の観察が必要な場合、医療機関受診なども含め、個別記録への記載と別に申し送りノート、受診記録などを活用し情報の共有に務めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	多様化する様々な利用者のニーズに対応できるように、常日頃より心がけている。実現可能かは別にして、一旦話し合い、臨機応変に対応できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	昔ながらのなじみの関係を継続させ、地域ボランティアの協力等地域資源の活用と協力を得られるように努力している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者の健康管理は特に重要なファクターであると認識し、その上で、本人と家族の了解と納得の上で適時、医療機関の受診している。	かかりつけ医は本人・家族の意向を尊重し、協力医やこれまでの医療機関による定期訪問診療が行われている。受診結果については気になる点や薬の変更などがあれば、適宜家族へ連絡を行っている。口腔ケアについては、食後の歯磨きと義歯管理を個々に応じて支援し、必要があれば歯科受診が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業者内の看護師には利用者の健康状態の把握が出来る様に、また、スタッフ全員が情報を共有出来る様に記録、申し送りノートを活用し、適時的確な医療機関の受診と早期対応ができるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の地域連携室との情報交換や、入院時の状態把握の為に定期訪問を行っている。入院～治療～退院時の本人のリロケーションダメージを最小限に考え、退院後のADL早期回復にも配慮し対応を心掛けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルケアに関する指針を契約時に説明している。終末期になった時点で再度説明を行い、本人と家族の思いも十分に受け止め主治医と共に方針を共有し支援している。グリーフケアについても配慮している。	重度化・終末期支援に関しては、契約時に指針をもとに説明を行い、その時点での意向を確認している。また、家族の気持ちは変化するものであり、その時々で意向を聞き記録に残している。実際、そのような状況になったら主治医を含めて、今後の方向性など話し合う機会を持っている。急変時の対応についても契約時に書面で確認している。この1年ほどの間に2名の方の看取りを行っており、個々の状況によってホームで葬儀を執り行うなど、ご縁のあった方の最終を支援している。	主治医との連携により本人・家族の思いを十分受け止めた支援が行われている。今後もホーム独自の研修会により、出来得る最良の支援を継続されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定例の研修にて、緊急時の対応・心肺蘇生法・AEDの使用方法等を取扱い、自分のものできるように努めている。正確に慌てず出来る様に対応を共有しイメージトレーニングを行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、火災を想定した避難訓練を消防署の協力で行い、職員が利用者を迅速安全な避難誘導と身の安全確保が出来るよう実施している。また、非常災害時の対応マニュアル等策定している。	昼・夜を想定した火災避難訓練を年2回実施し、迅速な避難誘導ができるようにしている。非常災害時の対応マニュアルの作成と、備蓄を確保し職員間で周知を図っている。ホーム内は避難誘導の妨げにならないよう、物品の配置などについても配慮している。	自然災害のもたらす被害は想像を超えるものがあり、熊本地震を風化させないためにも、今後は机上を含め自然災害に関する訓練の実現に期待したい。また、今後の訓練実施の際は、家族にも参加を呼びかけ意見や感想を受ける事も良いと思われる。確保している備蓄については、チェックリストを家族へも報告することで安心に繋がると思われる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけが粗雑にならぬように、それぞれの利用者の立場に立った声掛けが出来るよう尊厳とプライバシーに配慮している。職員が気づいた時は直接職員へ注意し互いに気を付けている。	入居者への言葉や対応はその方の立場に立ったものであるよう、職員間で共有を図りながら、気になることがあれが互いに注意し合える環境に努めている。呼称は苗字が殆どであるが、下の名前のほうが反応が良いなど、家族からの情報もあり、個々に応じて対応している。入室時の声掛けやノックについては、周知徹底に努めている。また、身だしなみやおしやれについては、家族の協力も得ながら、望まれる装いや整髪などが出来る様にしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は利用者の声にならない気持ちをくみとり、さまざまなアプローチを行い希望の表出や自己決定が出来るよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフの都合ではなく、利用者本位のケアを最優先に考え、1人ひとり生活のペースが違うのは当たり前であり、可能な限り寄り添って支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その季節に合った服装や身だしなみを援助している。整髪も定期的を実施し、希望の店がある場合利用できるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者に希望の献立を聞いたり作り方の助言を頂いたりしている。それぞれのADLに即した生活活動の中で食事の下準備等、一緒に楽しんで出来ることは、なるべく参加していただけるように配慮している。	入居者の希望や旬の食材を取り入れた献立を作成し、調理は専任者を中心に職員が行っている。苦手な食材への代替えや嚥下状態に応じた食形態など個別に対応することで、残食も少ないようである。食材は法人関連の業者からの配達や、地元の米、物産館を活用し、安心や鮮度にこだわった食事を提供している。入居者は野菜の皮むきや切込み、味の評価等出来ることで食へ関わっており、職員は夕食時に検食者を設け同じものを摂ることで、思いを共有しながら、今後の食事支援に活かしている。	日常の食事に加え、赤飯やちらし寿司、巻寿司、行事食など入居者に好評のようである。今後も入居者に楽しんでもらえる食事支援の継続に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者に準じた食事形態や量を考え、介助も過介助にならないように気を付けて行っている。摂取量が少ない時は介助を行ったり、栄養補助食品を摂取して頂いている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に利用者のそれぞれ違った口腔内環境に見合った口腔ケアを行い、健康的な口腔内環境の維持に努めている。訪問歯科で治療や口腔ケアが必要な方へ利用して頂き職員への指導もあり清潔保持が出来ている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来る限り、排泄に対する身体機能維持に務め、尿意、便意の確認と排泄パターンを把握し、出来るだけトイレでの排泄を試みている。	個々の排泄パターンを職員間で共有し、出来る限りトイレでの排泄支援に努めている。また、布パンツや紙パンツ、尿取りの併用や昼夜での組み合わせを検討している。トイレトーパーに加え、入居者にとって馴染みの流せるチリ紙「おとし紙」も備えることで、安心や自身でのふき取りなど自立にも繋がっている様である。トイレ入り口には「便所」と書いて、(おたよりどころ)と添え書きするなど、職員の工夫が見られた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品や腸内細菌活性飲料の活用等を常日頃から行い、出来るだけ自然排便が出る様に日々努力している。自己排便が困難な方へは主治医へ相談し薬の処方を受け2日に1回は排便できるように支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人が気持ち良く入浴をするという事を基本とし、毎回のお湯の入れ替えを行い、完全に個別での入浴としている。入浴時間帯は本人の希望を伺い、入浴中はリラックスできるよう配慮している。	ホームの浴室はリフト浴が設置され、見守りや介助により安全な入浴を、週2回～夏場は3回の支援が行われている。失禁時はシャワー浴を取り入れながら、不快なく過ごせる様にしている。入居者は個浴でゆっくり入れることから、「気持ちよか～！」と発せられる様であり、職員も1対1ならではの「ここだけの話」を楽しんでもらえるよう努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	基本的な生活リズムは守りつつも、それぞれの体調や気分に合わせてという事を重視し安眠や休息が出来るよう個別の対応を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理もスタッフ全員が把握し、薬説明書も最新のものが介護現場で確認出来る様にしている。月1回の職場会議で看護師から服薬についての説明を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中で、それぞれの方が楽しんで時間を過ごしていただけるよう、得意な事・好きな事等伺いながら支援している。コーヒーや少しのアルコールなど嗜好品の把握をして気分転換を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近隣を散歩し季節感を味わうことが出来る。ときには遠方への外出ドライブをしたりしているが、今後としては家族や近隣の方への協力もお願いしていかなければならない。	敷地内や近隣の散歩をはじめ、町内へのドライブ、小・中学校の運動会見学など、地域へ出ることで交流の機会にも繋げている。また、桜や紫陽花、彼岸花、紅葉見物など季節の外出も継続して取組んでいる。家族の協力としては、ドライブや法事への帰省などが行われている。	今後は地域や家族の協力を得ながら、入居者の外出の幅や楽しみの機会を増やしていきたいとしている。取組が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には金銭管理は事業所で行っているが、本人のADLに合わせ少額をお持ちの方もいる。その方へは買い物同行を行い好きなものを選び支払うという支援を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの依頼がある時はいつでも電話をかける支援を行っている。手紙が届いた時は本人へ渡し必要な方へは読む支援を行っている。何か知らせたいと言われる時は代わりに伝えている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は大切なプライベート空間、その他の共有スペースも重要な生活空間であると認識し、換気や温度湿度調節を行い居心地の良い環境づくりをしている。毎月、ホールの壁に季節を感じられるように装飾したり、季節の花を飾るようにしている。	床暖房が備わったホーム内は、冬場でも過度な乾燥がなく居心地の良さに繋がっている。リビング食堂は、入居者の状況によってテーブルの配置などを検討し、訪問当日は雑段飾りを見ながら入居者が歌や日課の体操など、賑やかな日常の様子が確認された。玄関横の花壇の手入れは、入居者も見守り役として参加されており、季節の花が咲き誇っている。	ホーム内は臭気もなく過ごしやすい環境が作られており、今後も敷地内や散歩中に摘んだ草花など積極的に共用空間に取り入れられることを期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	広い共用スペース内においても、個々の思いやその時々のお気持ちに合わせて本人の思いにあった座席の配置等、考慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内での環境として自分の使い慣れた家具や装飾品の持ち込みを積極的に進めており、ご本人が少しでも落ち着ける空間作りに努めている。	入居時に居室の備品について説明を行い、それぞれが必要な品や馴染みの家具などを持ち込んで欲しい旨を伝えている。テレビを持ち込まれた方もあり、昼食後や就寝前などに好みの番組(スポーツや韓流ドラマなど)を楽しまれているようである。入居後は自身の部屋として安心して過ごしてもらえるよう、職員は物品の配置や不足の品などを家族と相談しながら進めている。見守りの状況に応じて、本人・家族の了承のもと居室の変更も行われている。	居室には入居者に馴染みのあるさくらやぼたんなど花の名の表札が付けられている。今後は花のカット絵などを添付することで、和やかな入り口になるものと思われる。取組に期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	生活機能レベルの維持と改善を重要視した対応は、日常生活を送るうえで非常に重要と考え、手すりや椅子などを適した場所で利用する事により本人が安全安楽に自立動作を行えるような環境づくりを行っている。		